

生研 ニュース

PHOTO 岡宮誠一

1991.5.10
No. 9

IIS TODAY

●第5部

片山恒雄教授

地震・都市防災とくれば、このひと片山教授である。千葉実験所内に多数設置された地震計のデータをもとに、地震時の地盤揺れの精密な解析を行っている。このように特定区域の地盤の揺れをくわしく測定している例はなく、アメリカ合衆国・カナダ・ニュージーランドなど海外へのデータ提供にも忙しい。

一方では、都市施設の計画を防災の観点から見直そうと努めている。防災は大事だと騒がれてはいるが、施設計画の中ではあまり重視されてこなかった。人生50代に入り、構造屋と計画屋の垣根を取り払いつつ、都市の安

全哲学の構築に情熱を燃やしている。

本年4月12日に「国際災害軽減工学研究センター」が開設された。その初代センター長として開設準備に追われるほか、映像技術室長・本学ラグビー部長としても幅広く活躍中。

学生時代の夢は映画監督になることだったそうで、インタビュー時間の9割は映画談義になった。グリア・ガースン、ジョーン・フォンテインなど昔なつかしい女優の名前が次々に飛び出してくる。まさに適任の映像技術室長は、ここ当分続くかもしれない。(K)

国際災害軽減工学研究センターの発足

4月11日に平成3年度予算が国会を通過して、本所に「国際災害軽減工学研究センター」という舌をかみそうな名前の新しいセンターが発足した。教授・助教授・外国人客員教授・助手がそれぞれ1名のミニセンター(?)だが、「自然災害の軽減に関する工学の基礎

研究及び技術開発を行うとともに、この分野における国際協力を推進する」ことを目的とする気宇壮大なセンターである。

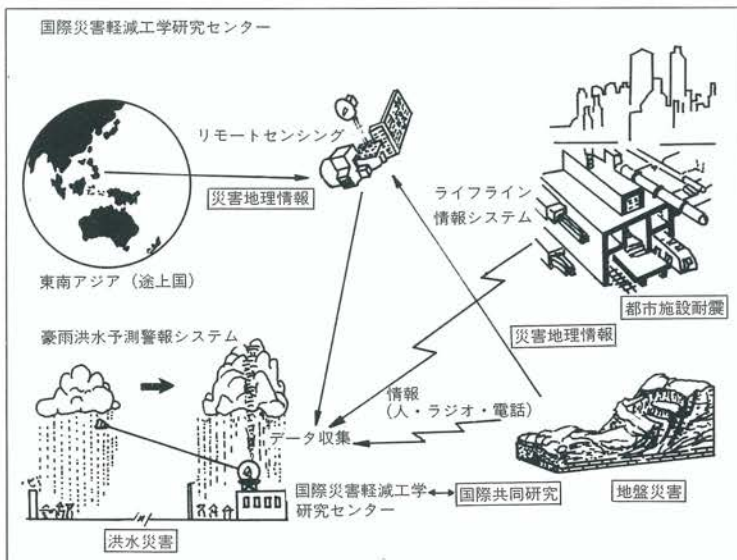
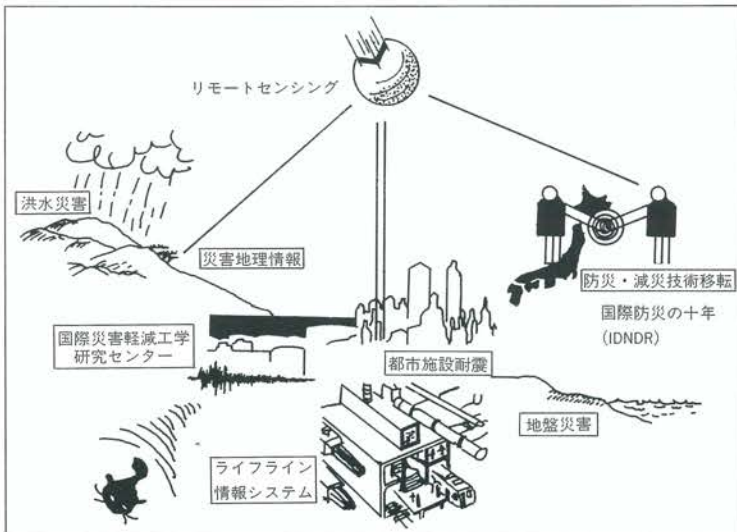
舌をかまないためには、「災害軽減工学」というところを一気に読むのがコツ。地震や台風の発生を抑えることはできない。被害をゼロ

にすることもできないが、工学的な手段で被害を軽減することはできる。これを目的に国際研究をやるというわけである。

ちょうど1990年から国連の「国際防災の10年」がスタートし、20世紀最後の10年、世界中の国が協力して自然災害による人命やものの損失を軽減するために努力しようという気運が盛り上がりつつある。生研には地震災害・洪水災害・地盤災害などの研究者が共同で研究してきた長い経験があり、災害地理情報とかそのデータベース化など、関連分野で活躍している研究者も多い。新しいセンターを中心に、自然災害から人命を守るために日夜研究を続けている国内外の人たちのネットワークができてくるような活動を考えたい。

もともとアイデアがこのセンターとして実を結ぶまでに3年かかった。初めは何十億円もの予算を伴う夢のようなセンターを考えていた。すでにかなり現実性を帯びてきた段階でつくった2枚の絵でさえずいぶん違う。マンガチックな上の絵がもっともらしい下の絵に変わっている。両方に共通しているキーワード、すなわち地盤災害、災害地理情報、都市施設耐震、洪水災害が、センターの当面の研究課題である。

生まれてまだホヤホヤのセンターが立派に育ってゆくよう、所内外のみなさまの応援をお願いしたい。(センター長 片山恒雄 記)



バンドン工科大学と 学術交流協定結ばれる



岡田所長（左）とSirait学部長

3月18日、本所とインドネシア共和国・バンドン工科大学生産工学部との間の学術交流協定書の調印が、岡田所長と同学部Sirait学部長により、バンドン工大Arismunander学長と本学・三川学術交流部会長（薬学部教授）の立会のもとに所長室で行われました。これは本所として2件目の正式な部局間学術交流協定です。

バンドン工科大学は首都ジャカルタから列車と車で3時間のバンドン市にあります。同国の理工科系大学の頂点に立つ国立大学で、理学部・工学部・芸術学部に相当する学部群からなり、学生数は本学の対応する学部とほぼ同程度です。同大学とは1988年から本所第3部石井研究室との間で熱帯雷に関する共同研究が始まり、双方の研究者の活発な交流が続いています。今回調印された学術交流協定は、より幅の広い交流を目指したものです。（第3部 石井 勝 記）

3

第6回生研NST シンポジウム開催

乱流の数値シミュレーション (Numerical Simulation of Turbulence) に関するシンポジウムが、3月8日(火)に本所NST研究グループの主催により開かれました。第6回を迎える今回は、「乱流のLarge Eddy SimulationとDirect Simulation」をテーマに10件の講演が行われ、参加者130名を越える盛会となりました。

講演は理論・検証・応用と多彩な内容で熱のこもった討論が続き、一部は終了後の懇親会に持ち越されました。比較的新しく、公表された研究の少ない分野でもあり、企画時には若干の不安がりましたが、参加者の関心の高さは驚きでした。なお、本シンポジウムの講演論文集は5月末ごろに発行の予定。（第2部 谷口伸行 記）



■ 盛会だった外国人研究者・留学生との懇談会



3月13日(水)、健保会館で恒例の外国人研究者・留学生と本所教職員との懇談会が開かれた。約150人(うち外国人約100人)の参加を得て、岡田所長の挨拶、生駒

国際交流室長の乾杯の音頭が日英バイリンガルで行われたのち、懇談に入った。今年の担当部の第5部片山教授・桑原助教授の司会で進められ、各部の外国人研究者や

留学生から、流暢な日本語を交えて本所や日本の感想が披露された。全員の記念撮影を行って、大盛会のうちに幕を閉じた。(K)

Do You Know Us? 研究交流委員会

研究所公開をはじめ、学術講演会、トライテック・コンファレンス、セミナー、基礎講座、講習会など、生研にはさまざまな行事があります。事務部のご協力と生産技術研究奨励会のご援助のもとにこれらの行事のお世話をし、それを通じて研究交流を推進しようというのがわれわれの第一の仕事です。そういう「お祭り男」的な現業活動と並んで、広報活動の作戦本部としての役割があり、とます

れば地味になりがちな工学研究をどのようにアピールしてゆくか、目下基本戦略を策定中、というと

きこえはいいですが、要するに頭をひねっているところです。
(研究交流委員長 木村好次 記)



上：高山、小林、宮田、宮路、葛西、藤田
下：香川、中荻、谷口、橘、木村(委員長)
(下線は委員)

PERSONNEL

■人事異動 (平成3年3月2日～平成3年4月1日)

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	旧官職(所属)
3.31	田村重四郎	停年		文部教官教授(第1部)
	河村達雄			(第3部)
	妹尾学			(第4部)
	小畑和彦		文部教官助手(第2部)	
	大川繁夫	定年		文部技官(試作工場)
	深山行雄			
	草間和三		文部事務官(第3部)	
	山本英夫	退職	文部教官助教授(第4部)	
	岩元和敏			
	弓削康平		文部教官講師(第2部)	
	田波徹行		助手(第5部)	
	小松原実		文部技官(第3部)	
4.1	小倉馨夫	配置換	文部教官千葉大学教授工学部	文部教官教授(第1部)
	長谷川洋	昇任	文部教官筑波技術短期大学助教授	講師(第4部)
	澁谷啓		文部教官北海道大学助教授工学部	助手(第5部)
	藤田大介	転任	総理府技術科学技術庁金属材料研究所	助手(第1部)
	虫明功臣	併任	附属千葉実験所長	文部教官教授(第5部)
	月尾嘉男		文部教官教授(第5部)(客員部門)	工学部
	神裕之		(第3部)	先端科学技術研究センター
	谷口伸行	昇任	文部教官助教授(第2部)	文部教官講師(第2部)
	柳本潤			
	古屋七郎		文部教官講師(試作工場)	文部教官助手(試作工場)
	加藤隆史		(第4部)	工学部
	李孝雄		文部教官助手(第1部)	文部技官(第1部)
	板橋正雄		(第4部)	(第4部)
	光田好孝	採用	文部教官講師(第4部)	
	太田丈児		文部教官助手(第1部)	
	吉田茂樹		(第3部)	
	大月積		(第4部)	
	宇都野太			
	川口健一		(第5部)	
	木幡行宏	転任		文部教官北海道大学助手工学部
	梅原要次	配置換	文部事務官農学部事務長	文部事務官総務課長

発令年月日	氏名	異動事項	新官職(所属)	旧官職(所属)
4.1	藤田隆	配置換	文部事務官文学部事務長補佐	文部事務官総務課長補佐
	高野胖		東洋文化研究所会計掛長	総務課出納掛
	川島平		医学部附属脳研究施設事務主任	附属千葉実験所事務主任
	最首八重子	昇任	文部事務官教育用計算機センター総務掛主任	文部事務官総務課研究協力掛
	坪源洋	配置換	薬学部会計掛	総務課出納掛
	葛西良三	昇任	総務課長	原子核研究所事務長補佐
	深野海蔵		総務課課長補佐	総務課契約課専門職員
	矢島金作		総務課業務主任(第3部業務掛長(併))	総務課第3部業務掛長
	西尾勉		総務課出納掛長	医学部附属病院医事課医事掛主任
	中川繁	配置換	総務課第2部業務掛長	総務課試作工場業務掛長
	武原稔子	昇任	総務課試作工場業務掛長	総務課出版掛主任
	初芝謹治	配置換	附属千葉実験所事務主任	総務課第2部業務掛長
	小松崎丈夫	昇任	文部技官総務課施設掛電気主任	文部技官総務課施設掛
	榎本道雄		総務課施設掛設備主任	
	桂マリ子		文部事務官総務課第2部業務掛主任	文部事務官総務課第2部業務掛
	宮下和子		総務課第4部業務掛国際交流主任	第2部
	吉原珠恵	配置換	総務課第3部業務掛主任	総務課課用度掛主任
	森瑩子		総務課第5部業務掛主任	総務課第3部業務掛主任
	井上正典		総務課課用度掛主任	総務課第5部業務掛主任
	益田宏子		総務課施設掛工事契約主任	総務課第2部業務掛主任
	薩日内いさを		総務課出版掛	総務課第5部業務掛
	磯山勉		文部事務官総務課第2部業務掛	総務課人事掛
	松澤幸子		総務課第3部業務掛	総務課第5部業務掛
	鈴木敦子		総務課第5部業務掛	総務課研究協力掛
	岡島義則			総務課厚生掛
	加藤耕士		総務課研究協力掛	総務課第3部業務掛
	大柳一夫			総務課第4部業務掛
	菊地仁一	採用	総務課人事掛	
	石井伸宜		総務課厚生掛	
	守山幸宏		総務課第4部業務掛	
	斉藤光夫		総務課出納掛	
	大西武士		文部技官(第4部)	
	佐藤聖一	転任	(第3部)	建設技官建設省東北地方建設局

●退官のご挨拶

学位は一年で
取れる



教授
小倉 馨夫

「学位とかけて足の裏の飯粒と解く」、ここでは「取っても食えない」。だが学位を取るまでとがんばっている人の多いこともまた事実だ。私も理学部の学生だったとき、4年間を費やしたある巨大な装置がどうも芳しくない、研究の筋が悪いのではないか、と思ったとき一切を放擲した。結局、自分自身で考える以外にないと感じ、独力で新しいテーマを設定してきっかり一年で学位をいただいた。黒田和男助教授のときも同僚の仕事を手伝いすぎて、気づいたときには残り一年ちょっと。テーマは私が決めたと思うが、一年あれば学位は取れると叱咤激励してやはり間に合った。結局は研究の好い筋をつかむことに尽きる。筋の悪い研究につきあっていると、それこそ一生を棒にふることを銘記すべきである。

思い出すまに



教授
河村 達雄

生研には、大学院の5年間を含め37年の長い年月にわたって大変お世話になった。

私が過ごした期間のうち、とくに前半は、電力需要の増大に伴って電力系統の高電圧化・大容量化がとりわけ要求され、新技術の適用が積極的に図られた時期でもあった。このような時期に電力工学担当教官として研究活動ができ、たいへん幸せだったと思う。研究以外にも、予算委員会や電子計算機室の仕事で事務官の方々や夜遅くまで議論し合ったことなど、今ではなつかしい思い出である。

各方面で長い間お世話になったことを心から感謝し、今後とも生研がますます発展するよう切望する。

雑感



教授
田村 重四郎

四半世紀を大過なく過すことができ、共に研究活動を行い、また援助や激励をくださった方々に感謝したい。昭和26年4月から西千葉の旧第二工学部校舎で教育を受けたときから数えるとなちょうど40年になる。

小学校から国民学校に変わり、戦後、教育制度は現在の形に変わった。その境目を歩んできた数少ない世代の一人であり、幸か不幸か価値観の著しい変化を経験しながら過ごしてきた。高等学校から大学の時代、過去の否定から始まった戦後の潮流に不合理と危惧の念を抱いたものである。それ以後の復興と興隆が、じつは否定されたものに支えられていたことが次第に明らかになり、また世界からの孤立が表面化しつつあるように思われる。過去の否定は現在を否定することにつながる——この単純な事実を忘れがちになるのは人の常だと言って済ませてよいものであろうか。

研究というもの



教授
妹尾 学

三十年余にわたって研究の場を与えていただいた生研の皆様へ深く感謝したい。子供のころから研究ということに憧れをもっていた。しかし三十余年を経た今は研究のむずかしさを身に沁みて感じている。研究というのは、若いころ思っていたように純粋な好奇心や探究心だけで成り立つものではない。独創性のある真の研究は、むしろ強靱な意志をもって推進すべきものだが、これに加え、社会的評価によってはじめてその価値がつくり出されるという側面も大きい。生産技術研究の意義は時代とともに変わっていく。社会のニーズと批判にこたえうる生産技術の確立を図らなければならない。あらためて生研の皆様のご健闘を祈る。

●定(停)年退職者表彰状伝達式

3月26日(火)、第4会議室にて下記の方々への表彰式と昼食会が行われました。

第2部助手
小畑和彦さん



第3部事務官
草間和三さん



試作工場技術官
大川繁夫さん



試作工場技術官
深山行雄さん



●平成3年度東京大学職員永年勤続者表彰式

総務課	文部事務官 厚生掛長	伊良波正之
//	文部事務官	菊地みつ子
経理課	//	永田順子
第2部	//	丸山正子
第3部	//	清水要
第2部	文部技官	荻野総子
第5部	//	藤野千和子
//	//	井出快子
電子計算機室	//	鈴木常夫
経理課	//	榎本道雄

標記の表彰式が4月12日(金)に神田学士会館で行われ、有馬総長が祝辞を述べられるとともに、134名に表彰状を手渡された。引き続き祝賀会に入って、岡田所長、鳥尾事務部長らと交え、それぞれの20年間の想い語り、和やかなうちに散会した。



(人事掛 岡村 克美 記)

INFORMATION

■生研国際シンポジウムのお知らせ

第8回生研国際シンポジウム「吸着分離の科学と工学」が5月20・21日の両日、日本吸着学会共催のもとに本所第1会議室で開催されます。参加ご希望の方は、第4部 鈴木(基)教授までご連絡ください。

■生研公開のお知らせ

本年度の生研公開は、きたる6月6日(木)、7日(金)の両日行われ、各研究室の研究成果公開と下記の講演が予定されています。

講演会 6月6日(木) 「軸・穴・パイプのマイクロファブリケーション」 増沢隆久 教授
「並列コンピュータと超高速データベース処理」 喜連川優 助教授

6月7日(金) 「科学技術と教育」 白石振作 教授
「地震災害に備えて—災害軽減工学のすすめ—」 片山恒雄 教授
「真空技術のブレークスルーと材料」 本間禎一 教授

■平成3年度 常務委員会 委員名簿

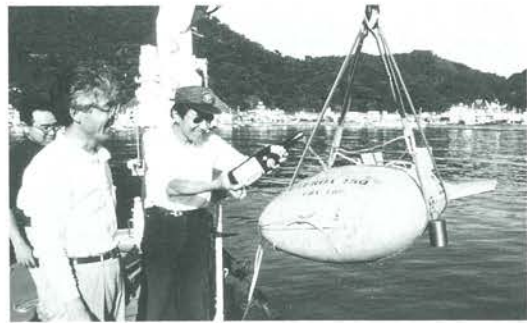
第1部	第2部	第3部	第4部	第5部
※高木堅志郎 中桐 滋	※中川威雄 吉識晴夫	※坂内正夫 高木幹雄	※二瓶好正 林 宏爾	※虫明功臣 高梨晃一

(注) ※印委員は部主任

オプティミスト

第2部 助教授 浦環

1990年11月8日晴。沼津の三津沖でやったこの日最後の実験航行は、私の寿命を少なくとも1ヶ月は縮めたであろう。5分で浮上してくるはずの海中ロボット「PTEROA150」が、6分たっても現れない。年頃の娘の遅い帰宅を待つ父親の心境か？日は暮れかかっているし、引き上げに手間もかかる。保険の手続きや再建造の煩わしさが頭をよぎる。夕刻になっていたのでこの最後の実験は取りやめればよかったと、悔んでも遅い。航海の安全を願ってマルセーユのノートルダム寺院にお灯明をあげてお祈りしたのに、菊正宗の特級をたっぷりかけてやったのに。反省が、悔みが、短い時間の中に頭をよぎる。さらに待つこと1分、ようやく浮上したじゃじゃ馬娘は、舵の不調で思わぬ深みにはまると、皆に遅い帰宅を詫言。「菊正宗をかけておいたから、この程度で済んだのだ。次の航海では、我が最愛の



モルトウイスキー-BOWMOREをかけよう。マルセーユにもお礼参りにいこう」と、父親は目をつむる。家族（スタッフ）は、娘にメシを食べさせ（充電）、潮のかかった服を洗濯して（水洗）、なんで遅くなったのかと根掘り葉掘り尋ねる（データ読みだし）のに忙しい。

「海中ロボット屋は、オプティミストでなければならぬ。ペシミストは何も成し遂げられない」とは、EAVEというロボットで15年も苦勞しているDickの言葉である。明るくいこう！ Underwater Robotics and Applicationと称しているURA研は、UnReliable Authorityと冷やかされもするが、本当はUltra Reliableなのだ。

8

NOW I AM IN JAPAN

第5部 大学院学生 マリハ・ファティマ

“Made in Japan”のマークは、台所の小物から自動車まで、母国パキスタンでは「高品質」の別名です。敗戦のあとすぐに立ち直り、世界の最先端の国々と互角にわたり合っている日本には、いつも感服していました。ですから、文部省の奨学金がもらえるようになったとき、行き先をすぐ日本と決めました。

いま土木工学科の修士課程に在学中です。土木工学科には外国人学生のための特別プログラムがありますが、ほかの学科にもあればいいのと思います。そうすれば、外国人とくに南アジアの学生が、母国

にずっと近い国で学位をとるチャンスができ、日本が南アジアの発展にいつそう寄与できることにもなりますので。

お寿司・てんぷら・おそばなど日本の食べ物は大好きですが、「緑を救おう」のキャンペーンを思うと、割箸にはやや抵抗があります。神社やお寺を訪ねるのも好きで、とくに正月の神社やお寺は印象深いものでした。



編集後記

生研ニュースを担当してから数ヶ月、一番印象的だったことは、写真撮影である。表紙を飾って下さった多くの方々の生き生きとした表情をフィルムに納めるまでには、場の雰囲気作りから始めるというこまめな撮影スタッフの努力を知った。

何が苦手かといって文章を書くほど苦手なことはない。私の書いた記事がもういくつか印刷されてしまったが、すばらしい写真にカバーされて、何とか体裁を保っている。編集室は、私にとってセンスのある文章を書く修行の場です。よろしく願いいたします。(K)